

江戸も東京もなくなる

浜田 道雄

大正のはじめ、永井荷風は東京の街についてこう書いた。

「電線を引くに不便なりとて遠慮会釈もなく路傍の木を伐り、また昔からなる名所の展望や由緒のある老樹にも構わずむやみやたらに赤煉瓦の高い家を建てる現代の状態は、実に根底より自国の特色と伝統の文化とを破却した暴挙と言わねばならぬ」

江戸は可哀想な街である。一七世紀はじめの開府以来幾度となく大火に見舞われ、街は灰燼に帰したが、そのたびに復興して「江戸らしい」街を作ってきた。だが明治になって新政府の西洋化政策で銀座は赤レンガとガス灯の街になるなど街並みは洋風に一変させられ、また荷風の嘆いた大正の「街の破壊」で「江戸の姿」はほとんど消されてしまった。だがそんな欧化した街「東京」も大正の大震災、昭和の戦火によって徹底的に破壊された。東京はそのたびに復興はしたが、いずれも「まったく新しい異質の都市の建設」であって、そこには江戸もなければ明治以来の東京もない。水郷といわれた本所、深川の掘割は遠慮会釈なく埋められ、舗装された道路に面したコンクリートの箱がつづく街ができていただけだった。

そしてオリムピック。国際的大事業の名のもとに、由緒ある川の上には無粋な高速道路を走らせ、川は薄暗いドブ川に替わった。ときの施政者や住民の多くが東京（江戸）を故郷とする人たちではなかったから、古い街の景観などには何の思い入れもなく、配慮もなかったからだろう。

今日の東京には江戸どころか、明治や昭和の姿を偲ぶものを見つかることも難しい。「歴史」を失った東京は可哀想なだけではなく、惨めでさえある。

そして荷風が嘆いた「東京の歴史の破壊」はまた繰り返されようとしている。今度はただ長い経済停滞を抜け出すために、街の活性化という掛け声で東京の大改造がはじまったのだ。「明治神宮外苑の再開発」という市街改造事業がそれであり、八重洲や麴町ではじまろうとしている超高層ビル建築プロジェクトなどである。明治神宮は第二次大戦後宗教法人となって「神宮の杜」や外苑を所有することになったが、この「杜」はもともと全国の国民からの「献木」を植えて作られたもの。「国民」の共同作品である。単に「神宮の私有」として、経済効率を錦の御旗としたデベロッパなどと一緒になって東京の景観や伝統までも消し去り、無機質なコンクリートジャングルに変えていいのだろうか。

東京に生まれ育ったものにとっては、こうした“開発”は永井荷風が憤る「自国の特色と伝統文化を破却する暴挙」であるだけでなく、“故郷”を失わせるものでもある。私たちはただ己の「ハイマート・ロス」を嘆き、これを「暴挙」と非難するするしかないのだろうか。